



おらせ 酪青研Web講習会を新たに企画!

～日本酪農青年研究連盟が独自のWeb講習会を企画～

未だ新型コロナウイルスの感染拡大が終息していない中、日本連盟では新たにWeb講習会を企画しました。この講習会は酪青研としても初めての取り組みであり、お手持ちのスマホやパソコンにて講習を受講することが出来ます。牧場の従業員研修や勉強会の際の資料として十分に活用することが出来ます。この企画の大きな特徴としては24時間、いつでも・どこでも受講でき何度も視聴することが出来る事です。

●第1回講習会 「新型コロナの影響 ～主要酪農国と日本の違い～」 ※約40分程度
講師 雪印メグミルク株式会社 総合企画室専任部長 野村俊夫 先生

第1回の内容は日本と外国のコロナ情勢の違いや乳価状況について徹底解説しています。なお、視聴については貴重なデータが含まれていることと情報漏洩防止のためIDおよびパスワードを希望者に発行していません(動画公開期間45日間)。受講を希望される方は酪青研事務局の大山(080-2031-3915)まで電話またはショートメールにてご連絡下さい。後日必要なパスワード・IDを個別にご連絡致します。

プロジェクトX ～酪農民と雪印のあゆみ～

今年2020年は雪印乳業食中毒事件(2000年)から20年の節目の年を迎える。そこで事件から20年を迎える今、【プロジェクトX】では酪農民と雪印の歩みを振り返る。第3回は酪青研分断の危機について(引用文献:雪印乳業史、酪農風雲録)。



「酪青研事務局としての苦悩、すべては酪農家のために」

企業賛助金の捻出も決まり軌道に乗り始めてきた酪青研運営。しかし時は昭和20年代。当時の酪農係は現地補導業務(家畜の診療)がメインであり、診療の合間を縫いながら酪青研の事務局運営を精力的に行っていた。そのため肉体的にも精神的にも苦勞は多かったと事務局長を委嘱されていたU酪農課長は振り返っている。特に当時事務局員として第一線で作業にあっていたY担当の精力的な行動を振り返っている。「事務局のY君はガリ版で酪農青年の再刊、夜は簿記を学び酪青研の経理内容をきちんと整理した。年1回の全国大会が迫ると総会資料の提出に毎日夜遅くまで本社別館1階で仕事をした。新年度の事業計画でいつも激論を交わし気が付くと石炭ストーブの火は消えすっかり冷え込んだこともあった」と回想している。「酪青研」の火を決して絶やしてはならないという当時の事務局員の熱い情熱が伝わる。

「北酪社が雪印・北海道バターに分割、酪青研分断の危機」

北酪社は、昭和23年2月「過度集中排除法(排除法)」の指定を受け、北海道の酪農界は暗雲に閉ざされた。「過度集中排除法」は、連合軍最高司令官総司令部(GHQ)の最高司令官、ダグラス・マッカーサーの指令のもと、独占資本による過度の経済支配力を排除して「日本経済が再び戦争経済に転化する危機を未然に防ぐため、日本における私的な工業、商業、金融、農業の企業結合を解体させる」というものだった。

当時、北酪社は全国生乳量72万石に対し、北海道の生産量43万石を掌握し、しかもバターのシェアは70%以上に達していて、排除法に指定される懸念があった。しかし、北酪社は、零細な農民資本による組合組織から発展したもので、すでに資本構成も民主化されているから指定を受けるには当たらないと、各方面に陳情し、排除法指定の解除を求めた。

しかし、指定から2年後の昭和25年3月30日、受諾に至った。北酪社は「雪印乳業」と「北海道バター」に分割したのであった。両社とも新会社として発足直後で不要不急の出費は出来るだけ減らそうとしている時期だったことから、企業賛助金はまたも暗礁に乗り上げかけ、会社が二分割したことで当然酪青研も二分割すべきとの声も挙がった。また酪青研は各社に所属させるべきなど、酪青研は存続の危機に晒された。しかし、酪農家からの「酪青研は自主的組織、一本化を堅持」との声で分割意見を一刀両断。こうして未曾有の分断危機を乗り越えたのであった(続く)。



当時の開拓農民の抜根作業(全て人力で開墾)



黄金の腕を駆使しての診療(当時の酪農係)

特集 とかちびと 一十勝の地で生きる人

今回は北部地方連委員長を務める佐藤光寿委員長にクローズアップしてお話を伺います。

File.10 佐藤光寿さん 「酪青研で刺激と気づきを得た」

(北部十勝地方連 陸別単研)



「地域の大先輩方に声をかけてもらったのが入会のきっかけだった。現在のフリーストール牛舎を導入したのも酪青研の影響。自分にとっては無くてはならない存在だ」と屈託のない明るい笑顔で振り返る。「酪青研はまだ若い自分にとって様々な刺激と気づきを得る貴重な場そのものだった」と語る。

佐藤委員長が就農したのは昭和58年、就農時は将来構想を描きながら作業に従事していたが、平成5年6月23日に牛舎が全焼。家族同然に接してきた乳牛97頭を一瞬にして失ってしまった。その後、酪農の世界からは離れサラリーマン生活を送ったが、離農跡地の購入と新牛舎建築を実現し酪

農の道に再チャレンジ。酪農家という「夢」を掴み、平成23年には(株)アクエリアスとして法人化。現在は飼養頭数130頭、草地面積は67ha、年間出荷乳量は1,100t。ベトナム実習生4人を受入れている。

「経営リスクはすぐ隣にあることを痛感した」

今回のコロナショックで、経営リスクがより身近にあることを痛感したと振り返る。「これまでは比較的、副産物価格も安定していたが今回の一件で副産物収入を見込んでいた生産者は大ダメージを受けた。今年オリンピック景気やインバウンド需要を見込んでいただけにショックを隠し切れなと思う」とコロナショックの影響について振り返る。自身の経営についても「ベトナム人実習生4人に働いてもらっているが、タイミングが少しでもズレていたら人手不足に陥った可能性がある。そうなっては経営は立ち行かなくなる。また従業員・経営主が感染してしまったら牧場の経営損失は計り知れない。小さなことが全て繋がり経営リスクになることを今回のコロナウイルスで痛感させられた」とリスクはすぐ隣にあることを痛感したという。



実習生とともに撮影!

「乳業と一緒にやれることを一歩ずつ」

業務用・学校給食の需要減により飲用需要が大きく落ち込んだことでプール乳価の下落や消費者の牛乳離れなど様々な問題が表面化してくるのではと懸念を示す。「まずは乳業メーカーと一緒に家庭内での需要喚起はもちろんだが、酪農家からのメッセージ発信も今まで以上に積極的に行動を起こしながら、酪農家・乳業と一緒に知恵を絞りながらコロナと戦っていければ」と胸の内を明かした。「一日も早くコロナが終息して酪青研の皆でワイワイ集まれる日が来て、皆で全国大会に行ければ良いのだが」と語る。

「次世代に良い経営基盤を残したい」

今後の夢を聞くと「まずは65歳で定年するために子供たちに良い基盤を残していきたい。それが自分の責務」と笑顔で語る姿は印象的だった。定年後はしばらくゆっくりしながらセカンドライフを楽しみたいとのこと。

その穏やかな語り口調と包み込むような笑顔でベトナム人実習生からも愛されているのが一目で伝わる。「社長、妊娠プラスのお腹だよ!」と冗談を言われながら写真撮影に応じてくれた佐藤委員長。その笑顔はこちらまで元気を貰える「特効薬」だった。



チーム陸別(2018年全国大会にて)

酪農語録「北海道を世界一の酪農理想郷に」言葉:元北海道酪農協会専務理事 小林 道彦